

日本人の諷刺精神

紀田順一郎

日本人の諷刺精神

——落書とその時代背景——

紀田順一郎



蝸牛社

紀田順一郎 (きだ じゅんいちろう)

1935年、横浜市に生まれる。慶応義塾大学経済学部卒。評論（近代史・出版研究）を中心に活躍。

■主要著書

明治の理想（三一書房）牢獄の思想（三一書房）
開国の精神（玉川大学出版部）
書物・情報・読書（出版ニュース社）本の環境学
（出版ニュース社）現代読書の技術（柏書房）日
本の書物（新潮社）世界の書物（新潮社）読書戦
争（三一書房）古書街を歩く（新潮社）読書人の
周辺（実業之日本社）

日本人の諷刺精神

——落書にみる時代背景——

一九八〇年十二月十日初版第一刷

定価一八〇〇円

著者 紀田順一郎

発行者 荒木清

発行所 蝸か牛ぎゆう社しゃ

東京都練馬区南大泉町30-3

電話(〇三)九二四一四九一一

振替口座東京九一六二七六八

印刷・浩文社製本・イマキ製本

© JUNICHIRO KIDA 1980

1021-090054-1093

まえがき

落書は、われわれの遠い祖先が定型をかたちづくり、その継承者によって近い過去まで保存されてきた文芸的テクニクで、時事諷刺、権力罵倒の意図を当意即妙へ寸鉄人を刺すゝエスプリに集約した匿名批評の一種です。

それは戦国乱世の時代にあつては、「匹夫下郎」の荒あらしい諧謔であり、言論不自由な幕藩体制下においては庶民の鬱屈の解放手段であり、維新動乱期には世論の喚起と牽引に大きな役割を果す煽動の技術でもあつたのです。さらに明治前半期の言論闘争においては、匿名性はやや薄れますが、定型はそのままひきつがれ、反権力思想の普及に大きな役割を果しています。

ついでに言えば、落書はこの展開過程のなかに分解のモチーフを秘めていたということ、それが近代化の時点において露呈され、形式の喪失によって民衆の笑いの様式そのものを変化させていくという事情も、本書の問題意識から外すわけにはいきません。この視角よりするとき、乱世であり動乱期である現代に、かつての日本人が所有していたような独自の自己表出が発見されぬ理由は何かという、きわめて重大な疑問が生じてくるはずで、落書は外国にも例のないことではありませんが、わが国の場合のように長い期間にわたって複雑な発展をとげ、独自の効果を発

揮しながら、しかも一朝にして滅びてしまったという例はまったく類例のないことだと言えましよう。

落書そのもの、あるいは落書に溝条化キヤチイカされたところの日本人の諷刺精神は今やあとかたもなく失われていきます。したがって落書を考えなおしてみることは日本人の失われた才能を発掘するにとどまらず、近代における諷刺がいに人生と社会への決定的な態度となりえなかつた真の理由を追求することにもなるわけです。これをライト・モチーフとすれば、落書の栄光と没落の歴史は、おのずから描けることでしょう。

以上は落書研究にあたっての問題点を、ほんの二、三指摘したにすぎませんが、序論はこれくらいにして、直ちに落書の中心舞台にとびこんでみることにしたいと思います。

目次

まえがき	1
I 落書の興隆 天ニロナシ	
一 笑いの勝利	12
ムクロあらば今一度 厳肅なる勝利 恥辱の 連鎖 波及する哄笑	
二 民の声は神の声	17
天声人語の系譜 狂歌の淵源 天の使囀 チ ヤンスの文芸	
三 源平落書記	26
重盛の栄華 早くも落つる伊勢平氏 平家討	

つべし 古武士の感傷 武士団の登場

四 鎌倉落書党……………35

女院常に御座あり 二条河原の風雲 愚かな
るにや劣るらん 孤立する傑作

五 側面観太平記……………45

綸言アセの如し キツネの仮病 落書將軍義
満 首かき元年 恐妻伊勢物語 山名の赤入
道

六 国盗り落書……………56

商い宗祇とお伽衆 臨終のうた 勝利の哄笑
嵐の風は音たえて 罵倒の芸術 道は極楽人
は鬼 里見家の法度 狂歌を詠む武将

七 天下一統期の落書……………68

信長をめぐる武将 雑人は記すに及ばず 光

II 江戸落書選 寸鉄人ヲ殺ス

秀の反逆 地下の抵抗 太閤落書 関ヶ原の
ユ一モア 埋れた落書の可能性

一 戦国の余風……

80

島原落書党 追腹と謀反と大火 みやこの繁
昌

二 祖法の遵守……

86

獅子身中の虫 赤穂落書考 簡略元年 世相
不安 お蔭まいるの発端 大銭経 落書と権
力 享保改革と落書 喧嘩の色直し

三 幕藩体制の動揺……

109

狂歌という武器 狂歌の心・落書の姿勢 久
留米騒動記 小人の雄田沼意次 テレン国の
サムライ 諸人困究丸 出血はザンザ 川は

流れる

四 ロシアの船をまつ春……………126

寛政落書談 世界の潮 神風待望の精神 昼

夜のおツトメ 町年寄への頌歌 まいないつ

ふれ 外記の無念 南部よろこべ 落書の統

計

五 天保落書集……………146

どつと出でたる大塩が 水越と浜の松風 腹

をめしませ おらんだ文字の禍い

III 幕末落書篇 玉ヲ争ウ

一 アメリカ様……………158

上を下へとさわぐ浦 「ペロリ」遠方より来

る ロシアで頭をカキケケコ 聞いてくやし

い御調印

二 へっぼこ大名編……………168

水戸もない尾張大根 桜田門外血染の雪
なにしに来たノ 井伊了簡はないのかえ

三 浪士暗躍……………180

貼符の恐怖 やけじゃ、どやけじゃ 珍獣
「怖獅子」 国の面よごし 町中一同迷惑門

四 君命軽く身命惜しむ……………188

毛利が種まきや会津がほじくる 徳さんと長
さんの内輪もめ 太鼓うたせて長あそび 渡
るもこわき徳川のすえ 腹のへるのをなんと
西洋 徳川会津ロウソク屋 菊は咲く咲く葵
は枯れる くさいものには紙を張れ 当世よ
くばり武士

五 朝敵名目……………213

奸軍ゼニなし 江戸の水 諷歌の弾圧 三國
妖狐伝

IV 落書の終焉 民権自由ノ世ノ中ニ……

一 開化調詠版……………226

お直参は乞食さん 文明開化の音がする 埋
草落書は花盛り とりのこされた農民たち

二 明治パンチの抵抗……………238

「団々珍聞」の誕生 黒ダコ退治 ナマズの
一統 諷刺雑誌の弾圧 「団珍」の栄光と悲
惨

三 粹な自由の風が吹く……………251

マグナカルタで遊びたい 今にお金も自由党
民権論者の涙雨

四 近代化と落書の衰亡……………259

風土の変容 市民的正義と落書 権力における
ハマニユエリスム 機知に対する嫌悪

補論 近代諷刺精神の流れ……………270

史料・文献……………285

凡 例

- 一、引用史料・文献は巻末に一括、書目を五十音順に排列した。
- 一、時文の味を失わぬため、原則としてテキストのまま引用してあるが、諸本に異同がある場合は字句・表現の練れたものを探り、必要に応じて振りがなを施した。
- 一、長文の落書は、重要なものを除いて抄録とし、その旨付記した。
- 一、幕末落書の史料は桜木章「側面観幕末史」に負うところが大きい。とくに出典を記さぬものは同書からの引用である。

I
落書らくしよの興隆

天二ロナシ



●馬糞拾ひに擬した戲畫

寛政十年 十返舎一九自画作

グットムカシノイクサ
前度往昔軍

一、笑いの勝利

ムクロあらば今一度

「一国をかすむるも坂東をみな奪いとるもその罪同じかるべし。何ぞ天下をとらざる」

天慶二年（九三九）関東に反乱を起こした平将門は、興世王の戦国論理に使噓しきされ、まず関東八州の併呑に飛躍します。在地豪族の分裂、地方武士の割拠という特殊な条件が有利に働いたとはいえ、これが律令制下最初の反乱であっただけに「京官大いに驚き、宮中騒動」したのは当然でした。

しかし「新皇」将門が八省百官の制による一国ユートピアの夢もわずか三ヶ月、私敵貞盛と賞金めあての藤原秀郷（依藤太）との連合軍に敗れることにより挫折します。秀郷は一時将門に協力して天下をとろうと考え陣屋を訪れたところ、「周章出でて対面し、酒肴椀飯をかきすえて、種々にもてなす。その体甚軽忽なり。あまつさえ将門が食する所の御料、袴の上に落つる時に、みずからこれをはらい拭う。秀郷これを見て、天下をくつがえすべき人にあらず、その行跡民のふるまいなり」と幻滅し、ついに敵にまわった（将門純友東西軍記）というのですが、当時の武将の作法といえはこの程度のもので、秀郷の陣屋訪問はじつはスパイが目的であったと思われる。何人かの影武者を用いていた将門本人の顔を確認しておくためだったのでしよう。

将門の首は翌三年五月、京都で獄門にかけられますが、夜になると眼を開いて笑い「ムクロあ

らば今一度合戦すべき」と呼ばわったので、時にオコ（尾籠）の者が、

将門はコメカミヨリゾイラレケリタハラ藤太ガハカリゴトニテ（将門純友東西軍記）

と詠んだところ成仏したという将門伝説、これが中世に現われた狂歌体落書のはじまりとされるものである。

厳肅なる勝利

将門は嘲笑されることにより、はじめてへ死んだのです。笑うことがただちに勝利であり、笑われることが直ちに恥辱と敗北を意味した中世的感觉を知らねば、この挿話の内容は理解されないでしょう。より遠い昔、われわれの祖先にとって笑いということは、厳肅な境地を指し、「笑い笑われるということが、殺し殺されるというのとほとんど同じ程度に、われわれの生活にとって重要であった」（柳田国男「戯作者の伝統」一九二六）という直観は、諷刺の機能を考える場合の根底となるものです。

ではこの落書にあらわれた諷刺とはなにかというと、将門という一武将の挫折を背景動機をふくめた全体として扱うのではなく、その死因の一面面をとりあげているにすぎず、現代人の感覚からすれば諷刺というより揶揄にちかいです。将門は顛顛部を射られて死んだのですが、こめかみ↓俵↓はかり、という縁語と両用言葉を駆使した狂歌の技巧により生ずるところの滑稽が

ねらいなのです。

このような技巧はすでに職人的なものであり、オコの者というのも今日のバカ者という意味に風化する以前の職業的戯作者をさすものです。現に一書では藤六左近を作者に見たてていますが、これは擬人名でオコな歌や咄に秀でた者という意味なのです。

あかさいてしろたなごひに取替て 頭にしまく小入道哉（源平盛衰記）

寿永二年（一一八三）七月、入京した木曾義仲が洛中を荒らしまわったとき、家々に白旗を立て家主を追い出したことを諷した落書です。「あか」は平家、「しろ」は源氏の旗色、「たなごひ」は「てぬぐい」、「しまく」は「締める↓風巻く」の意味ですが、盛衰記の作者は「さしも乱れし世の中に、よくあとなき者もありけるとぞ申しける」と、落書の反響を付言しています。「あとなき」は「たあいがない」というほどの意味で、オコの者に通じます。乱世のただ中にこのようなゆとりを示すことが「あとなき」ものであるとは、当時の人々の感じ方であったわけですが、非難ではなく一種の嘆賞であることに注意したいと思います。

恥辱の連鎖

尾籠物語の発生は平安期とされますが、その時代の人々は、一方に厳粛な物語を必要とし、一方ではそのカタルシスとして等量のユーモアを期待するようになっていたのです。この社会的要